

釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 9

山川草木悉有仙性 鹿島釣狂

箸別川河口のサケ

9月だ。もうそろそろサケが沿岸に寄ってくる季節だ。1年前の道具を引っ張り出して準備する。17日(水)、午前中に増毛に向かって出発した。昼は増毛町山田酒蔵ラーメンで1年ぶりの酒蔵ラーメンを食べた。

箸別川河口に下り立った。先行者の釣り人は3名のみ。右隣りに声を掛けると、東京から来たという。東京からわざわざ北海道にサケ釣りに来たのなら、もう少し有名場所に入っても良さそうなものなのと思いつつ話を聞いた。

「息子の嫁の実家を頼って来ている。その実家が滝川にあるので1ヶ月と期間を決めて長居候しているのだ。毎日釣り三昧の生活をしている。オホーツクにもカラフトマス釣り行って来た。先日は広尾で大きなサケを釣った。昨年、ここに来てサケが釣れたので来てみた。もう少し遅い時期だったような気がする。何度か北海道を訪れている。道東の方へヤマメを釣りに行った。数はたくさん釣れたが型は小さいものばかりだった。」

「何という川でした？」

「よく覚えていないなあ」

「道東と言えば渚滑川とか？湧別川とか？頓別川とか？標津川とか？」

「いや、太平洋だ。」

「それでは、新冠川とか？静内川とか？」

「いや十勝川だ。広尾の方の川だ。阿寒川にも行った。本州のヤマメは大きいよ。40cmほどのヤマメを釣ったこともある。今日は釣れそうもないので帰ることにする。」と帰り支度を始めた。せっかくだからなんとか粘って1匹でも釣って欲しい。諦めないで頑張る

欲しいことを伝えたが、そのまま引き上げてしまった。

左隣はフライ竿を振っていた。私が駐車場で着替えをしていたときに、車の中でお昼ご飯を食べていた人で、日曜日によい釣りができたと話していた御仁だ。二振り程で40m程の距離を出している。フライは綺麗なループを描いて飛んでいく。ラインが磯波で洗われないうようにとフライバスケットを腰に付けていた。リーダーは5号ナイロンで、フライには大きな赤い羽毛を巻いていた。フライボックスを見せて頂いた。赤を中心にしたものが色とりどりに丁寧に並べられていた。バリバリのフライマンだった。

豪快にウキルアーを飛ばしている釣り人がいた。朝は仕事のために来られないという地元の人で、日曜日は良かったと言った。先週は稚内方面にカラフトマス釣りにも行ったが、あまり良くなかったということだ。12フィートの竿を操って70m程の距離を難なく飛ばしている。彼が言うには仲間はずっと飛ばすのだそうだ。私が「素晴らしい」と声を掛ければ掛けるほどその距離は伸びていったように思えた。

誰にもアタリがないまま時間が過ぎていった。河口の流れに任せてウキフカセをチョイ投げしている人が増えてきた。よく見ると河口にサケの背びれが見え隠れしている。偏光グラスをかけている人の話では、ほとんどが強いブナがかかっているものようだ。

フライに食った。サケが私の方に向かってきたので、退けようと動いたときにゴロタ場に足を取られて転んでしまい海水に手をついてしまった。サケが私を一回りしたのでウエーダーにそのラインが巻き付いた。慌ててウエーダーからラインを外すことになったが、その格好と言ったら真に恥ずかしいものだったように思う。無事にラインは離れたのだが、足のふらついた年寄りが這いつくばって右往左往していたのだ。そのサケはギンピカとは言えないが比較的ブナが薄いものだったにもかかわらず、すぐにリリースされた。

そして、川向かいの人が掛けた。何度もサケに走られてやりとりを繰り返していたが、渚にずり上げると尾ビレに掛かった物だった。これもブナは強くなかった。

私の竿にも、アタリが出た。グイッと竿を煽ると一気に竿を伸された。やっと私にも食いついてきたのだ。ギラッとシャケの魚体が光る。1年ぶりのサケの引きを楽しもうと竿を操作していると、フッと軽くなった。ばらしてしまったのだ。隣りの人は腹に掛かったスレだったというが、私は口だったように思う。さらにブナが強く掛かったものと言うが、私にはギンピカだったように思う。釣り逃がしてしまったのだから、そんな思いも虚しいのだが……。夕闇が迫ってきたので竿をしまうことにした。なにせ明日も私にとってはサンデーなのだ。

2時半に目がさめた。釣り場に向かうのはまだまだ早いと思っていたが、3台立て続けに車が入ってきて、釣り場に向かう様子なので、私もウエーダーに履き替えた。

闇の中で竿を準備して待った。ウキフカセのハリにはギョギョライト37を装着してオレンジのタコベイトを被せた。少し明るすぎるだろうか？ ウキに電ケミを装着して他の人が竿を振り出すのを待ったが誰も振らない。4時、私が1番に竿を振った。

電ケミがチカッチカッと赤く輝いている。潮の流れに乗せながらもリールを少しずつ巻

いたが、その電ケミは近づいてこない。クイっと竿を煽っても電ケミに変化はない。1投目で電ケミはウキから外れて素っ飛んでいったのだ。今度は強く差し込んで念のためセロテープで補強した。今度は大丈夫なようだったが、それでも10振りほどすると外れてしまった。今回、初めて電ケミを使ってみたのだが、ウキとの対応がまずかったらしい。仕方がないので、37mmギョギョライトを付けて振り込んだ。視認性は良くないが他のウキとの区別はついた。

そのウキが走った。竿にグーンと力が掛かった。昨日は掛かりが浅くて取り逃がしてしまっただが、同じヘマはしないぞと、グイッ、グイッと竿を煽ってハリを食い込ませた。右へ左へとサケが走る。最後は後ずさりしながら取り込んだ。サケの口元に赤のギョギョライトを被せたタコベイトが怪しく光って揺れた。ギンピカの大きなメスだった。

それを切っ掛けに周辺が慌ただしくなった。まだ夜明け前に備えていた釣り人が一斉に竿を振り始めたのだ。河口を流していた若者が掛けた。ギンピカのメスだった。ビニル袋にイクラをとって、シャケ本体は他の釣り人にあげていた。

その後、私もウキルアーに替えて何度も何度も振り込んだが、サケからのアタリはなかった。今日はもういいだろう。8時に私は竿を畳んだ。



今年の初物



イクラを抱えたギンピカのみすだった。

娘夫婦と孫を連れて小樽水族館に行った。大きな水槽では様々な魚に混じってヒラメが泳いでいた。タカノハも混じっていた。クロガシラは寝そべっていた。イルカやアシカそしてアザラシのショーを孫と一緒に見学した。

アザラシのダイビングショーの横で、釣りコーナーが設けられていた。1 m程の釣り竿にオキアミのエサをつけたものが100円で販売されていたのだ。水槽には、川ガレイとフグが放されていた。良く考えたものだ。フグといえばエサ取りの名人だ。アタリも出ないうちにオキアミが無くなっている。それでもたまに釣り上げてしまう人もいる。川ガレイはやはり掛かりやすいのかまだマシなようだ。それを見て1回ではもの足らずに何回も挑戦しているが、なかなか掛かるものではない。私がそれに挑戦したかって？ 私がやってしまったら水槽の魚がいなくなってしまうそうなので、そこは大人の対応で遠慮することにした。

衝突事故と思わぬ拾いもの

9月27日、岩見沢釣遊会第5回大会が庶野港～音調津港で開催された。

ほろ酔い気分で、大会での大物のアタリを夢想していると、急ブレーキが軋み、「ドッ、ドーン！」という炸裂音の後に続いてゴトン、ゴトンとタイヤが大きくバウンドした。庶野港に向けて襟裳国道336号線を快調に進んでいる時だった。「獣を刎ねたな？まさか人

ではあるまい？」と不安な面持ちでバスから下りた。辺りには血の臭いが漂っている。鹿だった。それも2頭だ。1頭は腹部が破裂して腸の塊がそのままの形で落ちていた。その横にもう一つ大きな内蔵が転がっていた。なんなのだろう。よくよく見ると、薄く白っぽい膜の中に頭の形をした物が透けて見える。雌鹿が子鹿を孕んでいたのだ。もう1頭には外傷はなく頭を打ったのかこれも即死の状態だった。

暗闇の奥から「ケーン、ケーン」と寂しげな鹿の鳴き声が聞こえてくる。仲間を死に至らせたバスと私達に向かって怒っているようにも聞こえる。亡骸はセンターライン寄りに横たわっているのだから、後続車が事故を起こしてはいけないと考え道路脇に寄せることになった。皆で協力して亡骸の足を持って引き摺った。私の震える手が掴んだ鹿の足は、まだ生温かかった。

バスの方は大丈夫なのだろうか？バスの前方に向かうと、バンパーの一部が剥ぎ取られ、ヘッドライトのカバーが割れて電球がむき出しになっている。雨が降っているのだからそのまま走るとショートして電球が切れてしまうので、透明ビニルを被せる応急措置をした。

事故処理のため、警察を呼んだ。庶野駐在所からミニパトカーに乗って署員がやって来て、事情聴取を受けた。運転手は、一旦私達を釣り場に下ろしてから再び対応してくれることになった。

私にとって、このような事故は、早朝の通勤時に道路脇からスルスルと横断してきた鼠を轢いた以来のことである。今回、私は匆ねられる寸前の鹿を見ていないので、何かかと思っただけだが、その時は、すり抜けてくれたかと思うまもなくブチッとした感触があったのだ。鼠でさえいやな悪寒が背中に走り、それがしばらく引き摺っていたのだから、運転手の思いはいかほどかと思う。心が落ち着くまでの休憩と、更なる安全運転をお願いしてバスは釣り場に向けて再出発した。

人間とは恐ろしい生きものだ。バスの中で、轢いた鹿を食べることは出来ないものかという話が出たのだ。1頭は、頭を打った即死で、血が流れていないので臭くて食べられないだろう。もう1頭は血がアスファルト上を覆っていたのだから肉に血の臭いは残っていないというのがその主張なのだ。更に急速冷凍にして刺身にしたら旨いだろうと言いつつのだ。おまけに腸は潰されもせず綺麗なままだったのだから、肉を挽いて腸詰めにすることも可能だろうと追い打ちを掛けた。

実は私も同じことを頭に浮かんだのだが、それを言い出すことは不遜なことだと思っていた。私が1年間勤務したことのある夕張鹿島では、知り合いに猟師がいた。夕張山中で仕留めた鹿肉を、スナックのマスターに分けていた。そのスナックで職場の仲間と飲んでいると、マスターが冷凍にしてあったヒレ肉を薄切りして出してくれたのだ。これをワサビ醤油で口にしたときは、舌にとろけてほろりと甘く、実に旨かったのだ。

最近読んだ五木寛之の「親鸞」の中で、人間の犯す数々の罪が語られていた。「殺生という行為はことに罪業深き行いと教えられてきた。生きものの命を奪う仕事は、罪であり、悪である。海や川で魚をとる漁夫がそうだ。山や野で獲物をとる猟師もそうだ。国からは

良民としてあつかわれている農民たちもまた、虫を殺し、害虫を捕らえ、雑草を抜いて穀物を育てる。人は殺傷を行わずには生きてはいけないのだ。『山川草木悉有仏性』山にも川にも森にも、草や木の1本1本にまで仏の光がやどっている。牛馬をほふり、魚獣をとり、戦で人を殺す者だけに殺生の悪を説くのはまちがっている。その穀物を食らい、武者を操りながら、贅沢な暮らしを続けているわれらも同じ悪を背負っている。蚕の繭からとった糸で織る美しい衣装をまといながら、華麗な法会を催す高い身分の人たちにむかって、仏の慈悲のありがたきを説くのは自分の役割ではない。」



1頭の鹿は頭を打って即死。もう1頭の写真は酷たらしくて紹介できない



透明ビニルで当座を凌ぐ。雨に当たると電球が切れてしまうのだそうだ。

私はタカノハ狙いで境浜で釣りをする予定だった。一旦、境浜でバスを停めてもらって見た砂浜は天気予報よりも荒れていた。沖で大きく盛り上がった波が何枚も寄せてきていては釣りをするところではないだろう。仕方がないので、アカハラを狙って音調津港で下りることにした。サケ釣り師が防波堤に並んでいた。土管から海水が流れ出ているところがあった。潮の流れで海水が噴出している。アカハラでも来ないかなとゴロとコマセで打ち込んだが、アタリは全く出なかった。一緒に下りた堀内正博氏は中防波堤の先に出て行って、アカハラ3本を仕留めていた。山田洋司氏もその背後で竿を設置しアカハラ2本の釣果だった。

舟揚場で竿を出していた荻野一利氏の所に様子を見に行ったら、アカハラやクロガシラ、ハゴトコなどを釣っていた。すると、携帯電話が鳴った。山田氏からだ。私の竿が大きく上下しているというものだった。山田氏に竿を上げてくれるよう頼んで近づいていった。しかし、山田氏は遠慮して竿を上げてはいないようだった。更に大きなアタリがあって竿を煽ると根掛かりしてしまった。獲物が土管の中に入り込んでしまったようだ。アタリは出続けているのだが抜けてこない。しばらく様子をきいた後、大きなアタリに合わせて強引に引いてみた。抜けた。しかし、魚も抜けてしまった。

北海道釣名人会のメンバーが南支部予選でこの界限に入ったが、どこも高波で竿を畳んで、港内に逃げ込んできていた。知った顔が見える。近江聡氏は外防波堤の付け根に入ったがゴミで釣りにならなかったということだ。河村久雄、窪田敏明、松橋哲也、越智靖基

氏の顔も見える。その彼ら名人級も駄目なのだから、自分に魚が掛からなくても仕方がないかと諦めがつく。

明るくなったら、彼らは漁港の右や左の磯へと移動していった。私も漁港の外に目を向けてみると、干潮に向かって波が少し治まってきているようだった。浮いていた大量のゴミも少なくなっているように見える。漁港の左の砂浜に移動した。ゴミは沖に去ってしまって道糸に絡むことはなくなっていた。小さなアタリでカジカが上がった。20cmに届くかどうかという大きさだ。その後、一度あった大きなアタリにも魚を掛けることは出来なかった。

今回の大会では各人、狙った岩場や河口に出たのだが、波が高くて急遽、港に逃げ込むことになってしまった。それでもなんとか魚の顔を拝むことができたものの低調なものとなった。そんなこんなで優勝はアブラコとアカハラを揃え967点を出した嵐氏、身長優勝は矢根氏のアブラコ39cmだった。尚、入賞者には前野会長から新米が提供された。



タカノハ狙いの境浜で利用するはずの1本竿立てが役に立ったのだが・・・

最後に竿を立てた背後の草原に、2本の竿が無造作に投げ捨てられてあった。2本の竿とも途中で折れている。困ったものだ。自分は、今日、リールのベールを折ってしまった。それでも、投げ捨てることはせずに家に持ち帰った。直すことは出来なくても替えスプールとして使うのだ。同じ型のリールを何台か持っているのだから、他のリールの部品として使

えるようになるかも知れない。愛用してきた3本のプロサーフは2本を駄目にしてしまったが、それを継ぎ足ししながら、1本を復活させて使っているのだ。

帰りにその拾ったリールを仲間に見てもらった。随分と軽いぞ！これはいいものではないか？ドラグ性能がないような気がするという意見もあったが、誰もリールの名前を当てる者はいなかった。古い型のようなのだ。

家に帰ってから、インターネットで画像を検索してみると、「トーナメントサーフ ベーシア45C」というモデルだった。今年のダイワのカタログを見ると、「トーナメントサーフ 45」は95,000円の値段が表示されている。ベーシア45Cと同じ型はないのだが、トーナメント45のDNAを引き継ぐハイグレードモデルと銘打って、「サーフベーシア45」が載っていた。同じ規格でその値段を見るとなんと56,700円の値段が表示されていたのだ。誰が投げ捨てていったのだろう。この記事を見て心当たりのある方は名乗り出て欲しい。持ち主が名乗り出ないのなら、もちろん私は大事に使わせてもらおうと思っている。



拾った「トーナメントサーフ ベーシア45C」